

## ティーチング・ポートフォリオ

長崎 靖子

(記入日：2023年 1月20日)

### 1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

日本語学(1) (日本文化学科前期選択必修科目 2単位)、日本語の歴史(1) (日本文化学科前期選択必修科目 2単位)、文章表現法 (日本文化学科前期選択必修科目 2単位)、日本語教育演習 (日本文化学科前期選択必修科目 2単位) など

### 2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

私の教育理念・目標は、学生が母国語である日本語の音声・文字・語彙・文法等に関する基本的な知識を学ぶことにより、日本語を、国語教育的立場とともに、日本語教育の立場から捉えることができるような視点を養い、日本語に対する興味を深めることである。

### 3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

今回は日本語教育演習に関し述べていく。日本語教育演習は日本語教員養成コースの後半で行う科目で、日本語学校での実習授業が含まれる。

実習に関わる授業であるため、コロナの影響はあったが対面で行った。実習授業に向けた指導案や教材を作り、何回かの模擬授業を経たのち、実習授業に臨むという流れである。

まず、前年度のビデオを見せながら、各々の実習生の問題点を確認する。そののち、実習で教える文型を選び、教案とともに授業に必要な教材を作り、最初の模擬授業を行う。模擬授業を行った後、その授業の構成や時間配分について検討し、授業をブラッシュアップしていくように努める。この授業の間に第1回日本語教育実習を行い、現場の先生から日本語教育の現状について話を伺う。また、留学生との交流会を行い、様々な地域から日本へやってきた留学生の話聞く。これは、日本語と外国との文化や考え方の違いを理解したうえで授業に臨んでもらいたいということによる。

第1回日本語教育実習が終わった後、さらに模擬授業を行い、受講者は各自の授業をさらに充実させるべく、授業の導入や展開の仕方など授業構成を考え、またそのために必要な教材を追加で作っていく。

第2回日本語教育実習は実習授業である。今年度は2つの班に分かれて実習

授業を行い、そののち日本語学校の先生から授業に関するコメント等、フィードバックの時間を設けてもらった。実習後の最後の授業では授業の様子をビデオで確認しながら、授業の問題点に対する話し合いを行った。

#### 4 成果（どうだったか：結果と評価）

皆、授業時間外も集まって授業の教案やオリジナルな教材を作る（エビデンス1）など、熱心な取り組みが見られた。模擬授業のビデオ（エビデンス2）で実際に自らが教えている授業を見ることにより、さらに授業に対するモチベーションが高まったと思われる。また、実際の日本語学校の留学生に教えるということで緊張感の中で、実習授業が行われ、そのあと日本語学校の先生方から適切なコメントをいただいたことにより、実習授業のビデオ（エビデンス3）も熱心見て、問題点を話し合うことができた。

#### 5 今後の目標（これからどうするか）

コロナの影響で、実習以外は日本語学校を訪問することができなかったが、今後、日本語学校と提携し、現場の先生方による授業見学を増やしていきたいと考えている。

#### 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 教案・教材（非公開）
- 2 模擬授業ビデオ
- 3 実習授業ビデオ

# ティーチング・ポートフォリオ

岩崎 利彦

(記入日：2022年09月1日)

## 1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

スポーツ(2) スポーツ (8)

## 2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

学生がスポーツの楽しさを体感するとともに、自身の身体組成に興味を持ち、生化学的根拠を理解し、知識を身につけるとともに、自身の身体で実践することで、継続的に QOL 向上に取り組む態度を身にけること。

## 3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

なにより「スポーツ・身体運動の楽しさ」を体感できるよう「身体を動かすこと」「走ること」の「楽しさ」「爽快感」を実践において経験できるようにした。

スポーツの文化的側面を理解してもらえるように、「遊びのルール化」「オリンピック」などの話しを交え、メディアで見ると自身が行うスポーツの繋がりも理解できるように工夫した。

また、人生 100 年時代を理解し、健康的な身体を手に入れることは、QOL の向上に不可欠であることを解説しつつ、そのためのトレーニング (身体づくり) 方法を、科学的根拠と指標を提示しながら、学生個々にあった負荷で体力づくりが行えるようにした。

2020 年度よりコロナ禍の影響により、オンラインで授業を行うことが主となっているが、このような時期こそ、「スポーツ・身体運動」が、免疫力向上にも、ストレス発散にも効果があることを理解してもらえよう、1 人暮らしの部屋で 4～5 分で行える、トレーニングなども提案する工夫をした。

## 4 成果 (どうだったか：結果と評価)

スポーツを行うには、休憩時間も必要となる。今期は人数が少なかった事もあり、計画した運動(量)を消化しても時間が余る状態となった。

その時間を使って、こちらの意図を細かく時間をかけて伝える事ができたのは良かったと感じる。また小人数の場合は、最初の声かけ次第で、学生の取り組み方が大きく変わるため、少人数の際は気をつけたいと感じた。

## 5 今後の目標 (これからどうするか)

オンラインでも 1 人でも「スポーツ・身体運動する」楽しさを伝える工夫  
「体力づくり」への積極的参加へのさらなる工夫

## 6 エビデンスとなるもの (資料の種類などの名称)

配布資料 運動時の心拍数の変化 (非公開)  
クーパーテスト (非公開)

# ティーチング・ポートフォリオ

眞田 尊光

(記入日：2023年2月14日)

## 1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

基礎ゼミナール〈1年必修科目2単位〉、日本文化入門(2)〈1年必修科目2単位〉、プレゼミナール〈2年必修科目2単位〉、日本の絵画〈2年～4年選択必修科目2単位〉、日本の仏像〈2年～4年選択必修科目2単位〉、文化財の保護と修復(1)・(2)〈2年～4年選択必修科目2単位〉、日本文化専門演習V(1)・(2)〈3年選択必修科目2単位〉、文献演習(1)・(2)〈4年必修科目2単位〉、日本美術史(2年～4年選択科目2単位)など

## 2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

日本の美術作品および有形文化財について、その特徴や背景にある歴史を学ぶことを通じて、社会生活をより豊かにするための教養を身につけるとともに、日本のみならず世界の文化の多様性を把握し、他者を尊重し共存して互いに貢献する意識を身につけることを目指している。

## 3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

日本美術関連の科目(日本の美術(1)・(2)、日本の絵画、日本の仏像、日本美術史)では、学生が作品や文化財を観察して理解する際に、デジタル画像・映像の利用だけでなく、絵画・彫刻・工芸品の実物や複製品を教室に持ち込み、学生がそれらを直に触れて学べる機会を設けている。また、同様に実物を観察する機会として博物館・美術館や寺社等での見学授業も実施している(今年度は東京国立博物館、成田山新勝寺等を見学)。

さらに、日本の伝統的な画題や意匠を深く理解するため、製品のデザイン案を提出させ、外部業者の協力を得て製品化するというアクティブラーニングも試みている(今年度は日本の美術(1)で「定規」を作成)。

文化財関連の科目では、地域における文化財の保護の実態を知るために現地でのフィールドワークを行うとともに(今年度は我孫子市と取手市の文化財施設を見学)、有形文化財(掛軸・卷子・茶道具等)の取り扱い方について実物資料を用いて実践的な指導を行っている。

## 4 成果 (どうだったか：結果と評価)

日本美術関連の授業では、初回授業内で簡単なアンケートをとり、各授業で取り扱う分野について学生がどの程度の前提知識を持っているか測っているが、最終回での試験やレポートの解答と比較すると、受講した学生の日本美術への理解が確実に深まっていることを読み取れる(エビデンス1)。

3年生の専門演習や4年生の卒業論文においては、全員ではないが、学生が自身の研究対象とした作品を美術館等で実物を丹念に観察し、そのうえで独自の意見をまとめていることを確認できた(エビデンス2)。

日本の美術（1）では、日本の伝統的意匠を参考にした学生のデザイン案をもとに、外部業者に委託して「定規」を作成し、学科内外に頒布した（エビデンス3）。

我孫子市や取手市の文化財見学で学んだことをもとにした、文化財の有効的な活用と保存に関するプレゼンテーションを各学生が担当し、現実に即した理解や知識を得ていることを確認できた（エビデンス4）。

なお、授業ではその時々で SNS 等で話題になっている展覧会や美術作品を紹介し、授業内容に絡めることで学生の興味関心を刺激し自主的な学修へと発展させている。今年度は琳派や運慶作品で、このことを再認識した。

## 5 今後の目標（これからどうするか）

今年度は対面形式に復帰したが、大教室で席の間隔を大きく取らざるを得ない状況はまだまだ続いており、教室前方のモニター画面を教室内の全学生に見やすくするため、席の移動等を考慮した。

なお、昨年度のリモートと対面のハイブリッド授業の利点を生かすべく、今年度も希望する学生には画像や映像を各自のデバイスで見られるように teams でのリアルタイム配信を試みたが、特定の教室では wifi の環境が十分に整っていないことや、動画の配信を活用し過ぎると学生所有のデバイスによっては電力的に負担がかかり過ぎるなどの問題点が発生した。来年度はこれらの点を踏まえ、効率的に大画面モニターと個別デバイスを併用できるように工夫していきたい。

また、学生が授業時間外に美術品や文化財に接する機会として展覧会や公開情報を積極的に紹介するとともに、授業の学外見学の機会も確保し、学生が楽しみつつ自主的に学修できるようにしていきたい。

## 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 今年度に学生が提出した試験答案とレポート（非公開）
- 2 今年度に学生が提出した卒業論文及び専門演習での発表（非公開）
- 3 定規（日本文化学科学生研究室にて公開・配布）

\* これまでに学生案をもとに製作した作品は下記の URL 参照。

<https://www.kgwu.ac.jp/2021/09/24/%e5%ad%a6%e7%a7%91%e3%81%ae%e6%96%b0%e3%82%b0%e3%83%83%e3%82%ba%e7%b4%b9%e4%bb%8b/>

- 4 今年度に学生が発表したプレゼンテーション（非公開）

## ティーチング・ポートフォリオ

伊藤 純

(記入日：2022 年 9 月 6 日)

### 1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

日本文化学科専門科目では「日本文化入門(1)」「日本の伝統芸能(1)(2)」「日本の民話・神話(1)(2)」「日本の宗教と思想(1)(2)」「日本の祭り  
と儀礼」「日本風俗史」「日本文化専門演習VI(1)(2)」「文献演習(1)(2)」、  
共通教育科目では「民俗学」「文化人類学」を担当している。大学院では「文化  
人類学特論I・II」を担当している。

### 2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

学生の関心や問題意識を尊重しながら、学生自ら課題を設定し、課題に対す  
る適切な方法論を用いることができる人材を育成することが教育目標である。  
特に文化を取り扱う領域のため、学生が民俗学・文化人類学の知識、方法、視  
座を学ぶことにより、自文化および異文化、さらに自己および他者に対する理  
解を深めることを目指している。

### 3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

「日本文化入門(1)」をはじめとする講義科目では、テキストを用いながらも、写真や  
動画を使ったスライドを用意し、初学者でも授業内容を理解できるように工夫した。フォロ  
ーアップとしてリアクションペーパーを配布し、質問があったときは、次週で回答した。「日  
本の伝統芸能」では、WEB で閲覧できる専門的な情報(「国指定文化財等データベース」  
「e 国宝」などの専門的なページや関連する動画、クラウド上の資料など)に授業時間外で  
もアクセスしやすいよう QR コードを資料に掲載した。演習科目では、図書館のグループ  
学習室を利用したライブラリワークや巡見やフィールドワーク、博物館見学を取り入れて、  
学生自ら必要な資料や文献を収集できるように指導した。

### 4 成果 (どうだったか：結果と評価)

「日本文化入門(1)」では、読解が難しい用語やテキスト内の不十分な説明に  
対しても、写真や動画などを補助的に使用した結果、自らの経験に引きつけて  
理解していることが確認できた(エビデンス1)。「日本の伝統芸能」では動画  
閲覧により、伝統芸能への関心が高まった(エビデンス1)。日本文化専門演習  
(1)(2)においては、学生自ら発表に必要な文献や資料の収集ができるよう  
になり、学生相互で討議ができるようになった(エビデンス2)。

## 5 今後の目標（これからどうするか）

事前・事後学修を促すために、基礎文献のリストを事前に配布し、読解のためのアドバイスをを行う。また、学修の成果をみるレポートの機会を増やす。学内で iPad の普及が進んでいるので、教室だけでなく事前・事後学修で利用できるように工夫していく。

### エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 リアクションペーパー（非公開）、レポート（非公開）
- 2 授業配布物 大学配布のアカウントの OneDrive に保管（非公開）